

伝記

米水津村の先哲

山田俊卿先生小伝

願朝 平 田 幸 市

はじめに

山田俊卿先生について、昭和四十四年九月発行「佐伯史談」第廿六号に、今なき山田平之丞氏が「俊卿ものがたり 山田俊卿先生と心学」と題してその道歌をかかげ、略伝を紹介下さっている。それと、やや重複の点はあるが、ややくわしく先生の伝記を、大正十二年五月、大阪心学明誠会発行「山本安蔵編「可耕山田俊卿先生小伝」」より、抜粋して紹介するものである。(文中敬称略)

山田俊卿、幼名嘉次郎、長じて俊策と称し、後俊卿と改め、可耕と号す。天保二年七月廿五日佐伯藩領米水津村宮野浦の漁家に生る。祖父善右衛門学に通じ、村内の子女を集めて教導していたので嘉次郎も師事す。性警敏強記、群童中及ぶ者なし。祖父大いに悦び一族一党中いまだ学問によつて身を立てたるものなきゆえ、何とかして大成せしめたい。將來家を興すには医家不如くはなしと、藩医三江元節の門に入らしむ。時に年十二歳。刻苦精励、忽ち同門中衆を抜くに至り、代診として患者を診ることとなつた。

嘉永二年十九歳。折しも領内に天然痘猖獗をきわめ、死者続出し惨状をきわむ。師と共に種痘の法を施すべく努めたが、誰も信用せぬのみならず、異端視された。たまたま藩の重臣矢野光徹の長男、三歳の文雄(後の藩医)に施術のことを托された。それが効果分明、他の民衆もこれに倣い、旧來の迷夢を醒すことを得た。恐らく佐伯地

方に於ける種痘の嚆矢である。

師の元節には嗣子がなく、俊卿は隔望されたが、祖父の高恩に報い、山田一家を興さねばならぬからと固辭し、同門の士友俊良を推し、俊良肥後守の地に修業中はよく師を扶け、その帰るを待つてはじめて大阪に出向した。大阪では名蘭医緒方郁造・斉藤永策、各務相二らについて学んだ。安政四年二十七歳の時である。しかし翌五年不幸恩師元節急逝の報に接し佐伯に帰ったが、後事の一切を委ねられたので、師家のため嗣子俊良を扶けねばならなくなつた。同時に町医を命ぜられ、はじめて二口俸を給せられた。然るに嗣子俊良亦病に臥れ、若干の負債をえ残して先代のおとを追つた。

以後七八年、師家の家政挽回に粉骨献身日夜精励、家族の扶養費、遺児の養費等を積立て、後顧の憂いなき操にして、その上で師家を辞去した。折しも良医なき故開業をすすめらるるままにそれに従つた。

慶応二年御扶持医師を仰付られ、中小規模三人扶持を給され、思いがけなくも士籍に列することとなつた。全く異数の光榮であつた。

しかし、尚大成を期して長濱に遊學、蘭医マンズヘルトについて、専ら内科の研究に専念した。

明治三年、同じ蘭医ポードイン、大阪に医学校を創設するや、單身上阪して入学した。三十九歳の学徒、その意気壯なりというべきである。既に医家として経験素質も豊富であつたので、忽ち附属病院勤務を命ぜられ、学理の研鑽と療術の實際に専念することとなつた。

半年後俊卿は、突然大学東校の召に応じて上京、訳書編纂御用係、大学大得業生に任せられ、更に神戸病院長として赴任、翌年八月文部省十一等出仕を命ぜられ、文部権中助教に任せられた。

この頃、貧病者救済のため、俊卿は神戸貧民病院を設立、米入ベレーの応援を得て、大いに期する処があった。またまた俊卿は佐伯に帰らねばならぬ用件を生じ、その留守中、姦人数輩、事を構えてこの事業を妨げ、為に閉院の止むなきに至ったが、後年慈恵救済の諸事業に尽さるる素因は、実にこの時からであった。

明治六年日佐伯藩公(高謙、当時東京在住)病篤しと聞き、直ちに上京治療に当り、これを癒すことができた。

明治七年俊卿年四十四歳、身を軍籍に投じ陸軍に奉仕、軍医補に任ぜられ徴兵官として各地に出張することとなった。またまた台湾事務部都督随行を命ぜられ、いわゆる台湾征伐に従軍、日夜傷病者の治療看護に勤め、帰朝後は近衛歩兵第二聯隊附を命ぜられ、翌年五月従七位に叙せられ、従軍勲章を賜わった。

明治十年一月、俊卿は第六軍管徴兵官として熊本に赴任し、大分県に出張中に西南の役が勃発した。谷將軍の急使に接した俊卿は即刻熊本に帰り、高瀬・植木・木葉・川底其の他交戦地の負傷者の治療に従事し、征討本部病院付となり、五月軍医に任ぜられた。

このように、軍医軍医部の劇務に奉命、鹿兒島・都城・細島・佐伯・鶴崎等、各地の繡帶所を巡り、席温まるいとまとしてなく、西南の役が収まった後、軍医部の職務処理に寧日なく、年暮に至って漸く東京に引揚げ、東京本病院第一課出仕を命ぜられた。

台湾征伐以来、東奔西走昼夜兼行、寝食を忘れて軍國に奉仕した俊卿であつたが、その功勞は認められて、明治十一年六月勲五等に叙し双光旭日章を賜わり、かつ金五百圓下賜の恩典に浴した。時に俊卿は四十八歳であつた。

其の後、大阪鎮台病院第一課出仕を命ぜられ、傷項策

定のため管内各地に出張し、脚気患者輒地療養所設置のためまた各地を歴訪した。明治十三年正七位となる。

翌十四年俊卿は第四軍管の徴兵医官、鎮台病院の課長を歴任、各地の輒地療養所を総括、十八年四月勲四等に叙し、旭日小綬章を賜わった。その年八月本職を免じ、大阪鎮台病院医官に補せられ、翌十九年年齡満期に依って退職し、後備軍医員を仰せつけられた。

俊卿、時に年五十六歳であつた。

軍籍を退いた俊卿は、医業に専念する傍ら、かねてから心学知性の道を研究し、大いに自得、藁(わら)を極めていたので、時勢の推移による思想の変遷を憂えた。そこで社団法人心学明誠舎の中心幹部として、世道人心の教化に東奔西走し、老軀を擡げて東奔西走し、風雨寒暑の別なく、其の聘(へい)めに応じて到る処で講述し、民衆を感奮興起せしめたのであつた。

八十歳を過ぎても尚淡路全島をくまなく巡り、あるいは遠く宮城県下に於ける月余に及ぶ毎日の巡講など、まったく驚くべき元氣のみなざつたものだったという。

「吾人は、徳(とく)なく忠孝の人なり、又忠孝の人をつくるべし。苟(なほ)も人にして忠孝の心なくんば、縮(ちぢ)縮(ちぢ)人面獸身、人たる価値なし。我國古来忠孝を以てあらゆる道徳の基幹をなす。今や日進月歩、教育の施設大いに進み、諸種の文物制度整然と興隆、然るに不忠不孝の輩尠(すく)ならず、慨嘆(がいたん)の至りなり。俊卿老いたりと雖も幸に健なり、余命の存する限り忠孝主義の鼓吹に徹せん。」

之が俊卿生涯の信念主義であつた。ひとり呼号するだけだけでなく、全国におちたつて同志の賛同を求めて、高崎正風男爵を盟主とする全国的な一徳会の結成を見るに到らしめた。

佐伯中学創立直後、泰政治郎校長は全校生徒のため、ある日郷土出身の先賢者と紹介して、講演会を催した。その講師、異様なツル、坊主の老爺、居並ぶ生徒の一部で笑聲が湧いた。劈頭、壇上から大喝一声、甚だ不都合不遜も甚だしい……と怒鳴りつけて……所期の講演を続けた。

この主人公が即ち俊卿であった。恐らく心学普及忠孝鼓吹の精神修養談だったのだらう。

序だに校長の部屋に「一徳」と大書した衝立があった。当時既に同校長も、有力な同志であった。佐伯中学引退後は大阪に居を移し、心学普及の第一線に列し、俊卿没後にも尚明誠會運動に尽くされていた。

大正六年、長谷川等君大阪医大予科に入学上阪の節、父裕の添書を携えて俊卿宅を訪れた由。初対面、悉く上座に等君を上座に据え、後ろに両手をついて、

「私はあなたのお祖父さんに一命を助けて頂いて、今日あるを得ました。どうぞその恩を私に返させて下さい。何なりと私にできることはさせて下さい。」

とのことであつた。かくて俊卿の翰墨によって、在学中奨学金を支給されるようになったとか。山田の一命にかかわる事件の内容は、祖父（養川長兵衛）にも父にもついにきく機会なく、いまだに不明であると長谷川君の言葉である。

医療施業を本業とする傍ら、社会教化、世道人心昂揚のため献身、以下に記すが如き公共事業にも、率先その衝に当たつたのである。

明治三十二年、大阪市にペスト病が発生した。人心恟々として安んぜず、当時市はこれが予防委員八人を選任したが、他の七人は日ならず次々と辞任し、俊卿独り我

を忘れて最後まで予防施療を全うした。

その後、日本私立衛生会大阪支部役員を委嘱され、一般世人の衛生思想の養成のため、府下全域に衛生談話会を開設して巡講指導、市立衛生会の設立に至らしめた。

かく公衆衛生に尽くすのみならず、慈善善根の社会奉仕精神は年々熱烈の度を加え、困窮家庭や難病者救済の貧民病院、慈善濟済病院を創設、之并日後、大阪慈善病院と発展し、現弘済会病院の基礎を築き上げた。

又癩患のため救癩施設を専らにするため、自らの山田病院を拡充し患者を収容、多年苦心究明の治癩の丸薬（アンチヘブリン丸）の効頭を、天下に確認せしめた。

感化事業、免因保護事業、身障者教育等にも実績の見るべきものが多いが、就中盲啞学校の創設、校外児童の生活指導のための孝子会の設立には、当初自邸と解放して尽力した。

さらに助学会を設立して、貧困家庭の子弟の進学費の供與、精神薄弱児の教育保護施設等々、俊卿の察案で着々と実現するに至らしめた。

桃花塾は大正五年二月の創立であるが、その趣旨に賛同、早くより敷地の買収資金の調達等、あらゆる準備のため協力贊助、設立認可を受けて之が運営の一切を、同郷の岩崎依一に委ねたのである。桃花塾と俊卿の關係については、俊卿の葬儀の日、岩崎の捧げた左の平詞で明らかである。

弔 辭

大正十年五月八日、山田俊卿翁長逝せらる。嗚悲しい哉。

翁はもと豊後佐伯藩の一小村に生れ資性警敏、幼時祖父の薫陶を受け、長じて医学を修め、藩閥階級

の世に於て一躍士籍に列し、後身を軍籍に置き明治七年の台湾征討、明治十年の西南の役に従軍して勲功を建つ。然るに明治十九年軍職を退きしよりは専ら心学の復興を計り、慈惠病院の設立其他幾多の慈惠救済の事業に尽し、孝子会を創設し、有名なる文天祥忠考の騰刻をなして之を天下に頒布し、或は施本をなす等、以て忠孝主義の鼓吹を計り、五ヶ年の歳月を傾倒して先人の嘗て想ひ及ばざる五拾億円貯蓄団の組織を完うし、アンチヘブリン丸を發明して癩癩患者の救済に努むる等、多年社会救済に尽瘁せられし偉功は、世人の等しく周知して欽慕措かざるに及ぶ。

翁大正五年五月勅定の藍綬褒章御下賜の光栄に浴す。宜なりと云ふべし。翁又特に異常児童の保護と教育とを目的とせる我桃花塾の事業を賛し、創立以来斯業のため翁の尽瘁せられしに及到底今ここに述べ尽すところ非らず。翁は實に桃花塾の一大恩人なりとす。桃花塾今や事業の拡張を畫策するの秋に方り忽焉として逝かる。凡夫殆んど為す所を知らざらんとす。翁子素私を見ること子の如く、私の翁を慕ふこと又真に父の如くなりき。今より再び其温容に接すること能はず。歳敬嗚咽に堪へざるなり。噫悲しい哉悼ましい哉。唯靈前希くは御在世の如く冥護を垂れ私をして大過なからしめんことを。私も亦益々奮勵以て斯道の為一生を捧げんことを期す。謹みて靈前に哀悼の誠を表し、併せて私の決意を掲げう。

大正五年五月十日 桃花塾長 山崎 俊一

俊卿は国家国事に關しても常に憂慮尽瘁するところ多

く、日清戦争勃發するや老躯を提げて再度従軍せんと、第四師團長に志願書を出した。その意氣の壯たるを賞せられはしたが、實現は不可能であつた。時に俊卿七十三歳であつた。

日露戦争に及んで軍資金若干を献金、天王寺駅、桃谷駅に臨時軍事病院が設置され、ここに收容される傷病兵の前線より兩所に分送されるを迎え、全家族を率いて到着の郁度不自由な傷病兵の面倒を見、鋭後衛軍の誠を尽くした。

俊卿は忠若愛國の傑士、権化とも言ふべく奉公の志厚く、且理財の道にも長じ、特に近時膨大なる國債問題については格別腐心、その償還策に對し同志と謀り、三百年後五拾億圓貯蓄団組織を結成し、知事の承認を求むるに至らしめた。而して上京日本銀行に至り、請願計畫成就素志の貫徹を見るを得た。即ち基本金四分利公債七千五百圓を日本銀行に保護預けとなし、その三百年後の元利合計全部を國債償還資金として政府に献納するという仕組である。時の内閣総理大臣寺内正毅、大蔵大臣武富時致共にその奇特を賛し、その登録に協力した。

天保、弘化、嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応、明治、大正と、九十余年を生きた抜いて、國家公共の福祉増進に献身した俊卿の偉大な功績は認められて、大正五年藍綬褒章御下賜の恩典に浴した。そして大正九年には第五回全國社会事業団体の總會を機に、多年社会教育事業に尽力した廉をもつて、記念品を贈られて感謝状を受けた。

その祝賀懇親会は上野精養軒で全國から集つた四百余名が多数出席、俊卿の健康を讃え、歓呼の声(以下28ページへ)

このきんぐは、浦まえては主食がわりにする大切な食料であった。今ではアルコールの原料として移出するだけで、食用にはしていないだろうが、昔は、三度一度は必ず食べていたものである。これを水にかし、柔らかくして炊きあげ、れんぎでつつきつぶして食べる。これを「つつき」といい、いもの甘味があつて、結構いける食物であつた。

このきんぐは、さらさら加工してかんぐろの粉を作る。きりぼしを臼でついて砕き、石臼でひき、絹ぶるいにかけておした粉がかんぐろの粉である。きめの細かい粉で、指先で触るとちよつと粘り気を感じ、いもあくのかげんか幾分黒みを帯びている。臼でひくとき、気長くよくひくことがだいじだから、水車ですつてもらうことが多い。

この粉でつくった団子や餅を蒸すと、まっ黒く黒光りに光るしろものができるのである。

かんぐろの粉を水でよくこね、両手の手の中で握つてつくった団子を、ふかしたものが「かんぐろ団子」である。「握り団子」ともいう。握った指の型がそのまま残るこの団子は、黒砂糖をつけて食べると、かんぐろ独特の風味がある。

また、この粉を水でこねたものを皮にし、中にあんこを入れて餅にし、さるかけのかわで包んでせいろうに入れ、蒸しあげたのが「かんぐろ餅」である。あんこには小豆のつぶしあんが一番ふさわしいが、「どしあん餅」といって蒸したいもをつぶして砂糖をちよつぱり加えたものや、特のいもを輪切りにしたものを包みこんで、いものふけるまで蒸した餅もあつた。

このかんぐろ団子もかんぐろ餅も、素朴で、野趣に満ちた郷土食の一つである。

まだある。このかんぐろの粉で作った団子を入れたかかんぐろだんご汁は、甘味がありおいしいものである。さらにまた、この粉を練って、めん棒かれんぎで平たくのばして、蕎麦を作るように細かく切り、熱湯でゆであげ蕎麦と同じようにはかけ汁をかけて食べる。これを「いもきり」といって、かんぐろの一つの料理法である。味はもちろん蕎麦には及ばないが、これも野趣に満ちた食べ物の一つである。

いもくらの一人である私も、これまで長い間、いもの恩恵に浴してきたものであるが、現在、いもは、私だけではなく、佐伯の人の誰からも敬遠されているのであるまいか。いや、今では浦まえてもいなかでも甘藷はあまり作らなくなつており、かんぐろの粉などほとんど手に入らない。そんなご時世である。

かんぐろは、ただ単に昔の懐い出の一つに数えられてゐるだけとなつてゐる。
(この項おちり)

(32P下段のつづき) 堂に益れたという。俊卿亦堂々謝辞を述べ、壯者を凌ぐ意気を示した。

風呂焚きの其の身は煤に埋もれて
人の垢きば 洗ふ土のかま

この一首は、その時の結語であつた。俊卿常に曰く、人の世話並に物事の世話をする者は、一に曰く心を勞し二に曰く足を運ぶ三に曰く時間を惜しむな。然らざれば決して潤はずなと。

大正十年五月七日、午前中は老躰異状なく、蔵書や軸物の整理をしていたが、昼食後尿を敷かせて横臥、やがて昏睡に陥り、翌八日眠るが如く大往生、九十一歳の天寿を全うした。翌々十日阿倍野葬儀場に於いて、会葬者各階層一千余人に惜しまれながら生涯を閉じた。(終)